

令和元年度 教育論文

「地域とともにある学校づくり」の充実を目指して



御船町立七滝中央小学校

はじめに

平成31年度（2019年度）から義務教育課取組の方向に新たに「社会に開かれた教育課程の実現」が示されました。各学校で育成を目指す資質・能力を子供、家庭、地域及び関係機関等で共有し、連携・協働することによりその育成を図っていく学校指導体制の構築を推進することが望まれているのは、皆さんご承知のとおりです。

本校は、御船町教育委員会から「コミュニティ・スクール」の研究指定を受け、研究主題を『「地域とともにある学校づくり」の充実を目指して』として研究を進めて4年が経過しました。

研究内容としてのキーワードは、「長期的・継続的な活動」です。これまで、開かれた学校づくりや家庭・地域連携ということでもどこの学校でも取り組まれてきていることが、数年の単発的な取組となってしまわないようしなければなりません。今後、学校現場は「長期的・継続的」な視点をしっかり持つとともにその活動を日常的に修正工夫しながら取り組んでいく必要があるのです。

そのためには解決していかなければならない課題がたくさんあります。課題を解決していくためには、これまでの取組を見直していく企画力や発想の転換力が必要になってくると考えます。

本校の地域性を生かした研究開始以前の取組をベースとして、研究主任を中心として、各先生方、そしてあたたかい保護者や地域の皆さんのおかげで本校の取組は一定の成果を収めることができました。また、研究同人として、本年度の取組を論文として残すことができ、感謝の気持ちでいっぱいです。

この4年間、子どもたちにとっても、職員にとっても、家庭にとっても、地域にとっても、魅力ある学校であり続けるために、今、本校に勤務している私たちは何をしなければならないのかということを考えながら取り組んできて、再認識したことがあります。それは、「地域とともにある学校づくり」は「魅力ある学校づくり」そのものであるということです。

ありがたいことに、これまでの取組を評価していただき、昨年度の文部科学大臣表彰「優秀教職員組織（地域との連携・協働）」に引き続き、本年度は、教育分野で我が国最高峰の賞である「第50回博報賞」を受賞し、本校職員はもとより保護者や地域の皆さん、関係各位に大きなエネルギーをいただいたところです。

本年度の研究の成果を踏まえつつ、次年度では、さらに前進できるものと確信しています。我々教師自身もトライ&エラー&トライの精神で、楽しく研究を継続していきたいと考えています。

令和2年1月10日

御船町立七滝中央小学校
校長 大竹紳一郎

目 次

はじめに・目次

1	研究主題	1
2	研究主題設定の理由	1
	(1) 家庭・地域の実態	1
	(2) 児童の実態	1
	(3) 実態の分析	1
3	研究推進の課題	2
4	研究の仮説	2
5	研究の視点	3
	(1) 仮説1に関する視点	3
	(2) 仮説2に関する視点	3
	(3) 仮説3に関する視点	4
6	研究の構想図	4
7	研究の実際	5
	(1) 【視点1】組織の編成・活用	5
	① 「魅力ある学校づくり協議会」の再編成・活用	5
	② 「学習応援団」の活用	7
	(2) 【視点2】活動内容の「見える化」と校内研修の充実	9
	① 自然体験活動の「見える化」	9
	② 「七中小CSハンドブック」の活用と見直し	10
	③ 「地域とともにある学校」の年間計画の見直し	10
	④ 校内研修の充実に向けた「見える化」	10
	⑤ 職員の郷土史現地学習	11
	(3) 【視点3】学校と家庭・地域の双方向の関係の強化	11
	① 双方向の活動内容の整理	11
	② 学校への支援活動	12
	③ 学習応援団との連携について	12
	④ お返し・貢献活動	15
8	研究の成果と課題	18
	(1) 【仮説1】(視点1)組織の編成・活用についての考察	18
	(2) 【仮説2】(視点2)活動内容の「見える化」についての考察	18
	(3) 【仮説3】(視点3)学校と家庭・地域の双方向の関係の強化についての考察	19
	(4) 今後の展望	20

おわりに・参考文献・研究同人

1 研究主題

「地域とともにある学校づくり」の充実を目指して

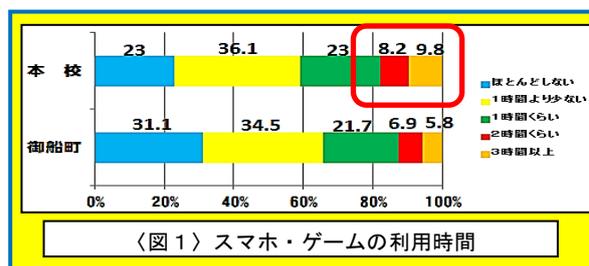
2 研究主題設定の理由

(1) 家庭・地域の実態

- ①本校は、本年度開校13年目を迎えた学校である。5校の統合により、校区は御船町の総面積の51%を占めている。
- ②平成20年9月に御船町より「小規模特認校」の指定を受け、町内全域が通学区域と認められ、現在13名の児童が制度を利用して通学している。
- ③校区は、豊かな自然や歴史的な史跡、太鼓や寅舞などの伝統芸能等、教育資源に恵まれている地域である。
- ④統合以前から学校と地域のつながりが深く、秋には地域の各種団体が参加する「地域総出」の運動会を開催している。また、PTA活動に協力的な保護者が多く、子ども達を地域で育てていこうとする風土が残っている。
- ⑤過疎化の進行、少子高齢化がもたらす地域コミュニティの中心的な担い手の高齢化や人材不足により、地域社会のつながりや支え合いの希薄化が問題となっている。
- ⑥過疎化・少子化による統廃合により、地域の人々にとって地元に残る学校という意識が少しずつ薄れてきている。

(2) 児童の実態

- ①児童は素直で明るく、仲間意識は育っている。
- ②幼少期からの少人数による固定化された人間関係により、児童同士の関係に序列化の傾向が見られ、自分の存在を肯定的に捉えていない児童、自分の嫌なことを相手にはっきり伝えられない児童も見られる。
- ③統廃合、小規模特認校制度により児童の通学範囲が拡大し、バス通学・保護者送迎の児童は全体の77%を占め、地域の方と顔を合わせる機会が減少している。
- ④豊かな自然に囲まれて生活しているが、同じ地域に暮らす子どもが少なく、電子メディアの使用時間、SNS利用率は都市部と比べても高い傾向にある(図1)。地域で子どもたちが遊ぶ機会も減少し、地域との関係が薄れてきている。



(3) 実態の分析

上記(1)(2)から、本校が果たすべき役割は、「校区の広がりによる地域とのつながりを一層深めること」「児童に地域への愛着や誇りを育み、地域の将来を担う人材に育成すること」である。つまり、学校と地域の人々が目標やビジョンを共有し、地域と一体となって子どもたちを育む「地域とともにある学校」づくりを目指して取組を推進することが必要であると考えられる。

3 研究推進の課題

本校は、平成25年度に「御船版コミュニティ・スクール」の指定を、平成28年度からは「熊本版コミュニティ・スクール」を、平成30年度からは「コミュニティ・スクール」の指定を受け、継続して「地域とともにある学校」を目指し、研究推進に取り組んでいる。

研究を始めたころは、以下のような研究推進上の課題があった。

課題1 「学校支援で来校する方の多くが、学校に近い旧上野小学校校区からであり、旧校区で学校への親近感に差があること」

課題2 「教職員の異動等により活動の継承がスムーズに行われず、地域や保護者の方が期待する活動が組織的にできなかったこと」

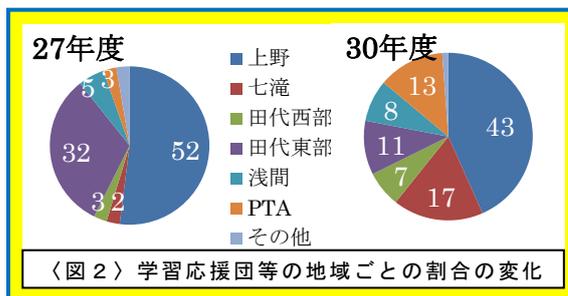
課題3 「学校を支援していただく地域人材の確保が難しいこと」

しかし、継続した研究により、課題1については、統合したすべての校区から来校していただけるようになってきた〈図2〉。

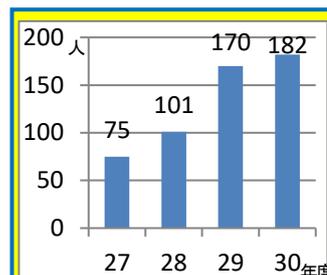
また、課題2については、「CSハンドブック」を作成し活用したことで、地域体験等の活動がスムーズに行われるようになった。

課題3については、学校を支援していただいた人数も増加し地域人材の確保がしっかりとできるようになった〈図3〉。

昨年度までの研究の成果を踏まえ、「地域とともにある学校」づくりをさらに充実・定着させ、長期的・継続的に取組を進めるために、以下のような課題が見えてきた。



〈図2〉学習応援団等の地域ごとの割合の変化



〈図3〉学校へ支援していただいた人数の変化（のべ人数）

課題1 「組織や活動について改善点を修正し、さらに職員間の共通理解を図ること」

課題2 「学校を支援していただく内容について、質を高めていくこと」

4 研究の仮説

本校の研究主題に迫るために、以下のような仮説をもとに検証を行うことにした。

【仮説1】

「地域とともにある学校」づくりを推進する組織を編成・活用し、学校と家庭・地域が相互に連携・協働していくことで、「地域とともにある学校」として長期的・継続的な活動ができるであろう。

【仮説2】

学校と家庭・地域が連携して取り組む活動内容の「見える化」と職員に対する研修の充実を図ることで、職員の地域への関心の高まりと活動内容の共有化が進み、「地域とともにある学校」として長期的・継続的な活動ができるであろう。

【仮説3】

地域に学校を応援していただくだけでなく、学校が地域に貢献する活動や地域への情報発信の取組を充実させることで、学校と家庭・地域との双方向の関係の強化が進み、「地域とともにある学校」として長期的・継続的な活動ができるであろう。

5 研究の視点

(1) 仮説1に関する視点

仮説1は、学校と家庭・地域が学校の教育目標及び校長の経営方針、経営の具体的実践事項、児童及び学校の課題等の情報を共有し、ともに目標の達成や課題解決に向けて連携・協働して教育活動を進めることができる基盤としての組織を編成し、活用することである。

視点1『組織の編成・活用』

学校と家庭・地域の情報交流の活性化にあたっては、既存の組織である「魅力ある学校づくり協議会」（コミュニティ・スクールにおける「学校運営協議会」の本校における名称）の構成メンバー、内容等を見直し、再編成が必要であると考えた。

また、学校と家庭・地域がパートナーとして連携・協働できるためには、地域人材の掘り起こしと統合した全ての校区から地域の方々に来校していただける機会を意図的・計画的に設定することが必要であると考えた。そこで、学校と地域との連携・協働の在り方について協議していく「学習応援団」という組織を編成し、活用することにした。

この2点を通して、本校の教育活動に関しての家庭・地域の理解は促進できたのか、学校と家庭・地域の連携・協働を支える基盤は整備できたのかについての検証を行う。

(2) 仮説2に関する視点

仮説2は、学校と家庭・地域が、連携して取り組んでいる学習応援団の活動、自然体験活動、地域行事等の諸活動が、中心的な役割を果たしてきた教職員の異動や地域の担当者の交代等により、停滞したり、満足できる内容ではなかったりすることが起こらないように、活動内容の「見える化」を図ることである。また、コミュニティ・スクールに対する職員の関心や内容理解を促すことができるように、校内研修の充実を図ることである。

視点2『活動内容の「見える化」と校内研修の充実』

活動内容の「見える化」にあたっては、自然体験活動の内容や地域連携年間計画、依頼文書をまとめた「七中小コミュニティ・スクールハンドブック」（以下「七中小CSハンドブック」）の活用を図り、活動内容の修正を行っていくことが有効であると考えた。

また、校内研修の充実にあたっては、コミュニティ・スクールに関する校内研修の時間確保と職員の地域への理解が必要であると考え、校内研修年間計画を細分化した研修計画の作成を位置付けることにした。

この2点を通して、活動内容の「見える化」により、地域との連携活動の質の確保はできたのか、校内研修の充実により、職員のコミュニティ・スクールに対する関心と理解は高まったのかについて検証を行う。

(3) 仮説3に関する視点

仮説3は、学習応援団や自然体験活動等の地域による学校教育への応援内容が充実するだけではなく、地域の祭りや敬老会等に児童や職員が参加したり、お世話になった地域の方々を招待しての会食を行ったり、地域の方々の学校支援の様子を情報発信したりすることにより、学校と家庭・地域が双方向に支援し合う関係が築け、連携・協働がさらに促進されることである。

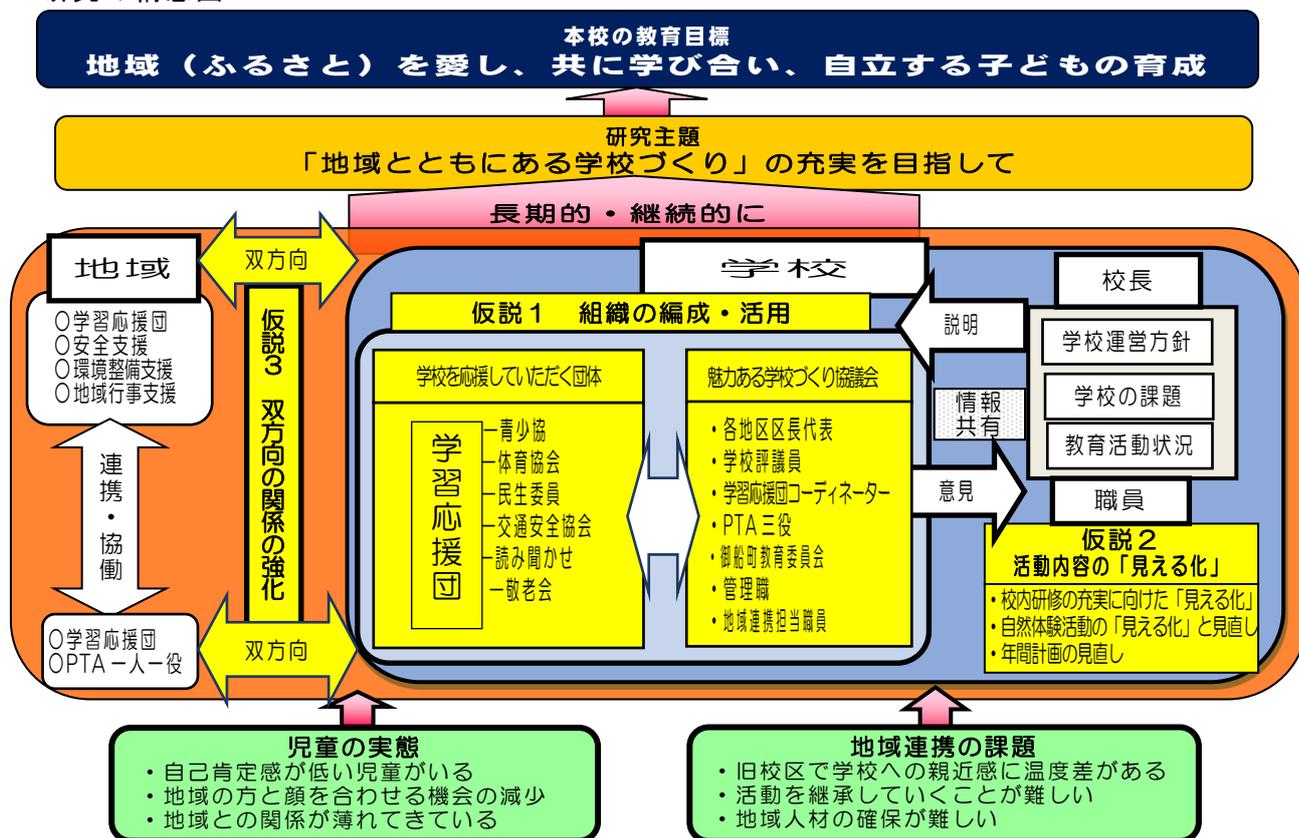
視点3『学校と家庭・地域の双方向の関係の強化』

地域から学校への支援活動の充実にあたっては、地域の方々が「学校に行って児童とふれ合ってよかった」「学校の役に立ててよかった」という活動への充実感が必要であり、地域の方々と児童がつながりを深める活動でなければならないと考えた。そこで、学習応援団の授業コンセプトの練り直し、活動内容の整理、活動時間や時期の見直しを行った。

学校から地域への情報発信では、学校の教育活動に応援していただいた地域・保護者の方々への感謝の思いと、コミュニティ・スクールとして家庭・地域の教育力を活かした学校づくりを推進していることが伝わる内容を工夫した。また、貢献活動では、学校と家庭・地域とのつながりがさらに深まるような取組を企画した。

この2点を通して、学習応援団の活動内容を充実させることができたのか、学校と家庭・地域のつながりを深めることができたのかについて検証を行う。

6 研究の構想図



7 研究の実際

(1) 【視点1】組織の編成・活用

① 「魅力ある学校づくり協議会」の再編成・活用

ア 再編成の重点ポイント

1点目は、「構成メンバーの再確認」である。平成25年度に発足した「魅力ある学校づくり協議会」は、平成28年度に委員の構成、人数の見直しを行い、より実質的で活発な議論ができる会議にしている。

今年度は新たに、御船町より「地域学校協働活動、コミュニティ・スクール推進ビジョン」〈図4〉が出され、委員10名程度が有償となった。そこで、「魅力ある学校づくり協議会」で規約の変更、構成委員の確認を行い、11名の方を有償とした〈表1〉。



〈表1〉「魅力ある学校づくり協議会」構成メンバーの比較

	平成27年度以前【10名】	令和元年度【21名】
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・学校評議員【7名】 ・教育委員会担当者【1名】 ・管理職【2名】 	<ul style="list-style-type: none"> ・運営協議会会長（兼地域学校協働活動推進員）【1名】 ・各地区区長代表【5名】 ・PTA三役【4名】 ・管理職【2名】 ・旧5校区代表【5名】（以上が有償） ・教育長 ・教育委員会担当者【1名】 ・地域連携担当職員【2名】

職員の異動や各委員の交代に伴い運営が滞らないよう、担当者同士の引き継ぎや交代の確認を行いながら、スムーズな運営を図っている。

2点目は、「視覚化による分かりやすい資料の工夫」である。学校は、会議の中で教育目標及び経営方針、経営の具体的実践事項、児童及び学校の課題等について説明し、家庭・地域に周知するとともに情報の共有を図っていく。その際、写真や図による視覚化された資料〈図5〉やプレゼンテーションを工夫すること参加委員の理解促進を図っている。



3点目は、「議事録による職員への周知」である。「『魅力ある学校づくり協議会』が何をする組織なのか分からない」と感じている職員が多いという課題を受け、協議内容を議事録にまとめ、職員への協議内容の周知を図っている。

イ 「魅力ある学校づくり協議会」の実際（令和元年5月29日実施）

会議の日程	会議の概要
1 開会 2 教育長あいさつ 3 自己紹介	重点ポイント：2点目 写真等による視覚的で分かりやすい資料と拡大資料による説明により、情報の共有化を図る。  

- 4 学校教育目標等の説明
 (1)教育目標及び経営方針
 (2)具体的実践事項
 (3)新「中学校へつなぐ重点指導事項の取組【教師用】」
 (4)「学習応援団・部活動の社会体育移行、今後の構想」

5 授業参観

児童の様子や教員の指導を実際に見て、その後の意見交換につなげている。児童は、顔見知りの学習応援団の方に、分からない問題を質問するなど打ち解けた様子が見られた。



〈図8〉委員による授業参観の様子

6 写真撮影

7 意見交換

【議題】スマホ依存症の未然防止に向けた取組について

重点ポイント：1点目

多方面からの学校教育に対する意見や課題解決に向けた提案が出された。地域の子ども達の健やかな成長への期待や学校教育活動への参画意識の高まりが感じられる。

〈意見交換会で意見の一部〉

会長：以前からゲームをする時間は、家庭で決めていた。学校でも取り組んで頂いたおかげで声掛けがしやすくなった。

運営委員1：子どもにとって睡眠時間は大切だとつくづく思った。

運営委員2：スマホにしても就寝時刻についても子どもばかりに言ってもダメ。親が手本を示さなければならない。

運営委員3：依存症の一番の犠牲になっているのは子ども達だと思う。頭が柔らかい子どものうちに、スマホ・ゲーム依存症を防ぐこの取組は、大変大切だと思う。

PTA 副会長：子どもを評価する親が一番できていない。親が変わる必要がある。この「ぐっすり睡眠週間」の取組は、親も子も成長させられる取組だと思う。

町議：スマホの使い過ぎはよくないが、コミュニケーションしていくためには上手く使いこなすことも必要と思う。

校長：おっしゃるとおり、この取組は、スマホ等と上手に付き合っていく大人になるための取組である。

8 評価表記入

評価により、学校の目標や方針、地域との連携活動について情報の共有ができたことを確認している。課題については、各種団体と連携して対応策を考えている。

「魅力ある学校づくり協議会」評価アンケート					
評価項目	評価	4	3	2	1
1 学校教育目標及び教育方針 具体的実践事項について	②	3	2	1	
2 重要方針達成のための3つの柱について	④	3	2	1	
3 「学習応援団・地域体験活動」 取組の工夫について	④	3	2	1	

その他、気づき等がありましたら、自由に記入ください。
 見直し、評価の改善に活用させていただきます。ご意見、ご感想、ご質問、ご要望などございましたら、事務局までご連絡ください。

〈図9〉評価アンケート

9 閉会

10 給食試食会

会議終了後に給食試食会を行っている。野菜の値段急騰時には、委員の方から安く提供して下さるなどお世話になっている。



〈図10〉給食試食会の様子



「学校だより」で使用する写真撮影を行う。

〈図11〉記念撮影の様子

〈会議終了後〉

重点ポイント：3点目

会議の議事録を作成し、欠席の委員への郵送及び職員への回覧を行い、協議内容の確実な周知を行っている。

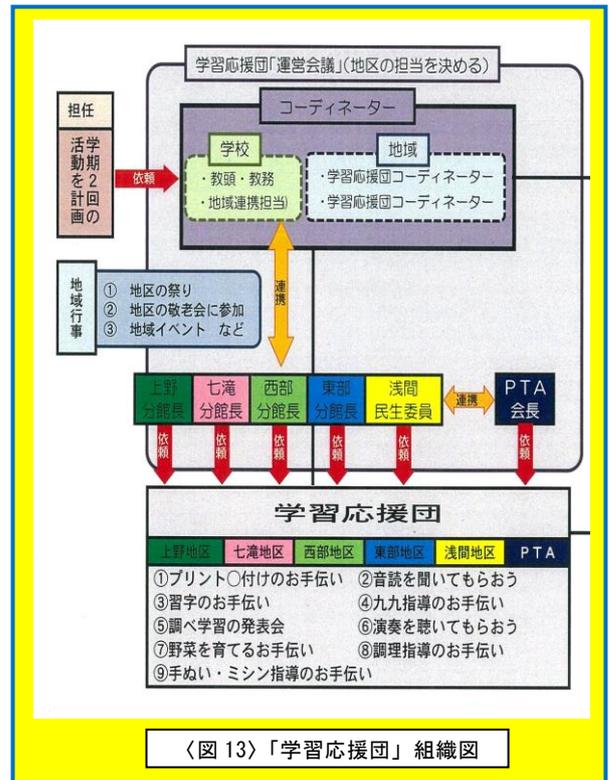
「魅力ある学校づくり協議会」協議 議事録			
議題	出席者	欠席者	議事録作成者
1 協議事項	校長、副校長、PTA会長、町議、委員	委員	委員
2 協議事項	校長、副校長、PTA会長、町議、委員	委員	委員
3 協議事項	校長、副校長、PTA会長、町議、委員	委員	委員

〈図12〉会議の議事録

② 「学習応援団」の活用

ア 組織の概要

「学習応援団」とは、児童の学習支援を活性化するための支援組織である。授業に入り、指導補助、傾聴、励まし、採点、体験等をしていただいている。「学習応援団」運営委員として、地域からは、地域コーディネーター1名、各地区公民館分館長5名（浅間地区は民生委員）、PTA会長1名を選定し人材確保の各地区の窓口となっている。学校からは、校長、教頭、地域連携コーディネーター2名、研究部2名を選定した。これらをもとに作成したのが右の組織図である（図13）。



〈図13〉「学習応援団」組織図

イ 組織編成のねらい

1点目は「地域人材の掘り起こし」である。本校は校区が広いので幅広い知識や経験をもち、学校の教育活動を応援していただける方が地域には数多く存在すると考えた。

2点目は「地域が身近に感じる学校づくり」である。統合したすべての校区から地域の方々に来校していただき、本校の教育活動や児童の様子を知っていただき、学校を身近な存在として感じてもらいたいと考えた。

3点目は「学校総体としての地域教育力の積極的な活用」である。GT・ATの活用が職員任せになると、職員間の意識差により活用に差が生じ、地域教育力の積極的な活用は促進されない。学校総体として、地域教育力の活用を図っていくことが必要であると考えた。

ウ 「学習応援団」活用の見直し

昨年度

- ① 打ち合わせに時間がかかる。学習応援団運営会議に担任が全員参加し、打ち合わせまで行うようにした（図14）。



〈図14〉担任との打ち合わせの様子

- ② 活動の日程に重なりがある。学習応援団の授業実施期間を2週間と決め、その期間の中で計画を立てた。

今年度

- ① 地域の方が年間の見通しを持ちづらい。学習応援団実施計画書（図15）を作成し、会議の期日や活動を行う時期について最初の会議で共通理解を図った。

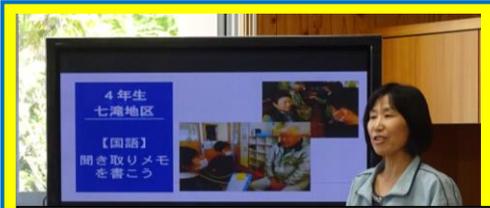
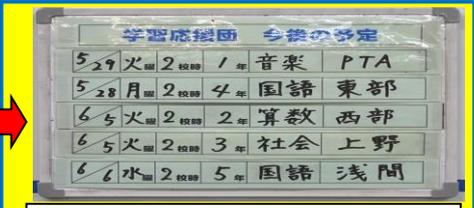
1学期	2学期	3学期
運営会議 5/9(木)	運営会議 9/30(月)	運営会議 1/17(金)
学習応援団活動	学習応援団活動	学習応援団活動
5月 第1回 日 月 火 水 木 金 土 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	10月 第3回 日 月 火 水 木 金 土 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	2月 第5回 日 月 火 水 木 金 土 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31
6月 第2回 日 月 火 水 木 金 土 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31	11月 第4回 日 月 火 水 木 金 土 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30	

〈図15〉学習応援団実施計画

以上のような見直しを行いながら取組を行ったことで、次のような成果があった。

- ① 公民館分館長等が窓口となり、確実な人材確保ができた。
- ② 各地区から来校いただけるようになったとともに、新規の来校者が増え、学校教育活動への地域の理解が進んだ。
- ③ 学期に2回という学校総体としての取組で、地域教育力の積極的な活用につながった。

エ 「学習応援団」活用の実際

<p>会議前</p>	<p>担任が学期毎に2回の計画（内容・時期・希望人数）を立案</p> <p>授業実施期間を2週間と限定することで、各運営委員との打ち合わせがしやすくなった。また、来校日の把握がしやすくなった。</p>	 <p>〈図 16〉「学習応援団」計画立案書</p>
<p>運営会議</p>	<p>運営委員と全担任が参加</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) あいさつ (2) 前学期の振り返りと反省 (3) 今学期の担当決め (4) 担任との打ち合わせ (5) 各地区行事等のお知らせ (6) 写真撮影・閉会 <p>全担任が会議に参加することで、内容確認が容易に行えるので担当地区がスムーズに決定するようになった。担当地区決定後は、打ち合わせを行い、期日決定を行っている。</p>	 <p>〈図 17〉前学期の振り返りの様子</p>  <p>〈図 18〉学習応援団運営会議の様子</p>
<p>2週間前</p>	<p>会議後に学習応援団活動計画〈図 19〉を作成し、それをもとに担任が各運営委員に電話で日程・内容の確認</p>	 <p>〈図 19〉学習応援団活動計画</p>
<p>日程確認後</p>	<p>職員室前面黒板に地域連携担当が予定掲示、進行を管理</p> <p>実施日、人数等を担任だけでなく、全職員で共有化することで来校からお見送りまで全職員で対応でき、「おもてなし」の心を込めた取組ができています。</p>	 <p>〈図 20〉「学習応援団」予定黒板</p>
<p>1週間前</p>	<p>参加人数・名前等の最終確認</p>	

(2) 【視点2】活動内容の「見える化」と校内研修の充実

① 自然体験活動の「見える化」

地域での自然体験活動（お茶、梅、玉ねぎ等）は基盤が整い、年間を通して計画的な活動ができるようになってきた〈表2〉。しかし、活動を継続していく中で、いくつかの課題が見られた。

〈表2〉自然体験活動の計画

月	活動	学年	お礼の会
5月	いも植え	1・2年	
5月	うめちぎり	1・2年	うめぎやが-チ- 【9月】
5月	玉ねぎ収穫	2・3年	玉ねぎ給食会 【6月】
5月	茶摘み・茶もみ	3・4年	お茶会 【6月】
6月	田植え	5年	
10月	稲刈り	5年	もちつき会 【12月】
10月	いも掘り	1・2年	おいもが-チ- 【11月】
12月	玉ねぎ植え	1・2年	

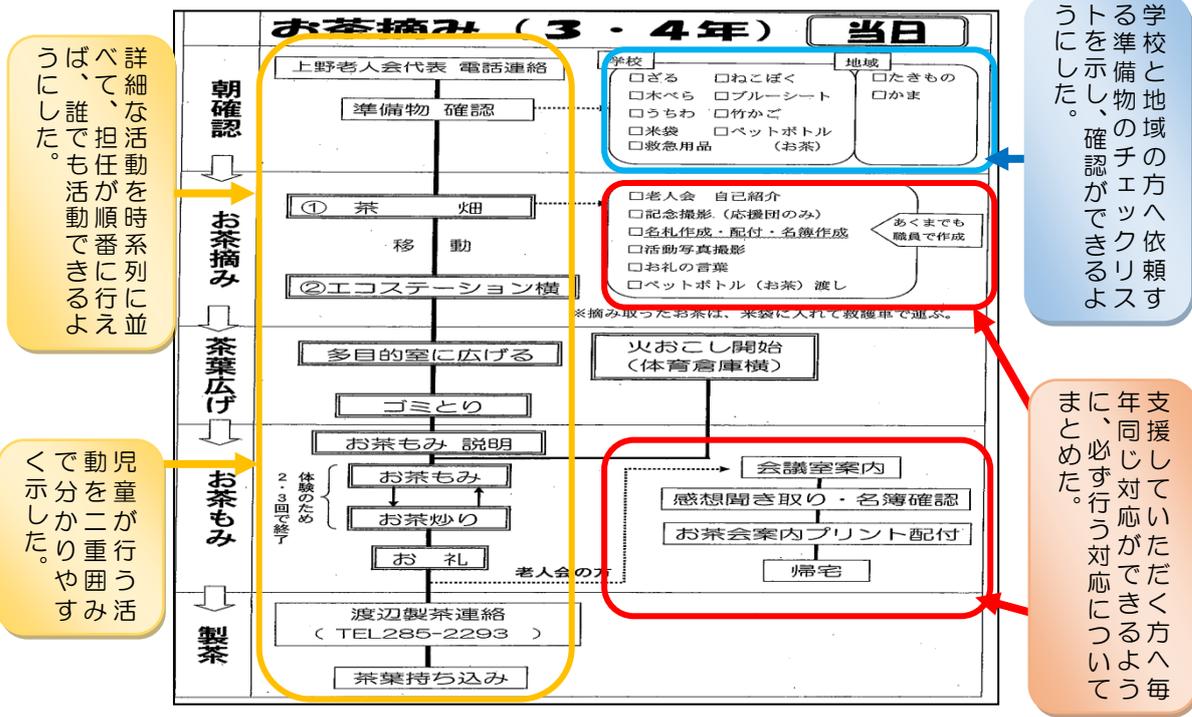
〈1点目〉職員の中で共有化が図られていなかったこと。

自然体験活動が担当学年任せの活動となっていて、異動や担任替えにより活動内容や連絡先等の詳細な引継ぎが行われず、関わったことのある職員の記憶に頼る部分が多かった。

〈2点目〉自然体験活動の計画が遅れがちになることが多かったこと。

自然体験活動は年度当初の活動が多く、担任が代わってすぐに計画作成や地域の方への依頼等を行わなければならない。そのため準備が遅れ、地域の方へ失礼になることもあった。

誰が担任になっても活動ができるよう、それぞれの体験活動の「見える化」による職員の共有化を図った。共有化を図るため、活動を時系列に並べ、フロー図を作成した〈図22〉。完成したフロー図は、実施計画案や依頼文書等と合わせて「七中小CSハンドブック」にまとめ、全職員に配付し、いつでも見ることができるようになっている〈図21〉。

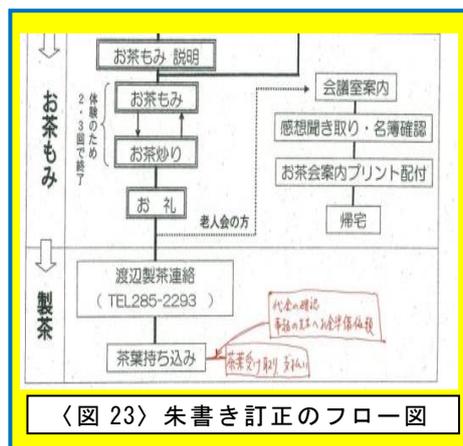


〈図22〉完成したフロー図

② 「七中小CSハンドブック」の活用と見直し

4月に「七中小CSハンドブック」を全職員に配付し、活動時期や内容の確認を行った。年度当初に1年間の活動の確認を行うことで、見直しをもった活動ができている。

自然体験活動実施後には、変更した点や反省を朱書きで書き込むようにしている(図23)。朱書きをもとに校内研修で時間を確保し、全職員で「七中小CSハンドブック」のデータの書き換え、更に使い易くなるように見直しを行っている。



〈図23〉朱書き訂正のフロー図

③ 「地域とともにある学校」の年間計画の見直し

年間計画の見直しについては、下表を作成して活用した(表3)。

〈表3〉「地域とともにある学校」年間計画

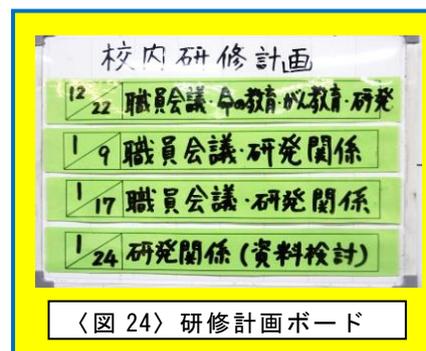
地域とともにある学校 年間活動計画		御船町立七滝中央小学校									
学年		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
1年	【学習応援団】				朗読劇発表会 計算〇付け賞					昔遊び生	自動車比べ会
	【体験】		梅ちぎり生 ジュース作り生 芋苗植え生	梅ジュースパ ーティ生					芋収穫生	玉葱苗植え生	
	【貢献】						敬老東部・上野				
2年	【学習応援団】			計算〇付け賞	音楽劇招待音			音楽会音	昔遊び生 かけ算九九賞	芋収穫生	玉葱苗植え生
	【体験】		梅ちぎり生 ジュース作り生 芋苗植え生 玉ねぎ収穫生	玉ねぎ給食総 梅ジュース パーティ生							
	【貢献】						敬老東部・上野				
3年	【学習応援団】			かけ算九九賞	林田能寛さん の学習道			戦争のころの くらし会		農家の仕事 社	
	【体験】		お茶摘み 総 玉ねぎ収穫生	お茶会総 玉ねぎ給食総							
	【貢献】						敬老東部・上野	祭美緑のむら 重			

④ 校内研修の充実へ向けた「見える化」

限られた校内研修の時間の中で、コミュニティ・スクールの推進だけではなく、学力充実に向けた研修や各種研修の充実を図っていく必要がある。そのために校内研修の年間計画を「会議等」「コミュニティ・スクール」「学力充実」の3つに細分化し、それぞれの研修時間を確保した(表4)。細分化することで、それぞれの研修内容が一目で分かり、計画的にコミュニティ・スクールの研究推進のための校内研修を進めることができた。職員室前面には、研修計画ボードの掲示を行い、職員が見直しをもって研修に参加できるようにした(図24)。

〈表4〉3分割の校内研修の年間計画

	会議等	コミュニティ・スクール	学力充実	
10/4	一日見学旅行			
10/11		地域体験活動フロー図作り2	事前研③(年)	下田・坂本
10/18	職員会議	地域体験活動フロー図作り3		教頭・下田
10/25			授業研③(年)	坂本
11/1	町人権教育授業研(3年)			渡邊
11/8		通知文・招待状作成	事前研④(年)	下田・坂本
11/15	職員会議 不祥事防止研修	魅力ある学校作り協議会について		教頭・中学年部 下田
11/22			授業研④(年)	坂本
11/29		評価検討	事前研⑤(年)	下田・坂本
12/6			授業研⑤(年)	坂本



〈図24〉研修計画ボード

また、年間計画だけではなく、70分の研修内容を充実したものにするために時間配分を厳密に行い、コミュニティ・スクールの推進はもちろん、学力充実についての研修も充実できるようにした。

⑤ 職員の郷土史現地学習

職員の地域理解を深めるために、夏休みには職員が現地に出向き地域の方を講師に、地域の教育資源について研修を行った〈図 25〉。校区には、継承されている伝統芸能や功績を残した先人、貴重な史跡が大変多く、毎年異なる研修を行っているにも拘わらず全ての校区を網羅した研修ができていなかった。そこで、現地学習を計画するにあたり、今までの研修内容と地区をまとめ、全ての校区を研修できるよう計画を見直した



〈図 25〉現地学習の様子

〈表 5〉現地学習の内容

年度	郷土史学習内容	地区
25	吉無田水源、九十九トンネル、元禄・嘉永井手にて（講話と現地学習）	田代東部・上野
26	大宮神社と寅舞について（現地見学と講話）	上野
27	吉無田、森林、浅ノ藪地区について（講話と現地見学）	田代東部
28	寅舞について（実演）	上野
29	響太鼓・獅子舞について、化石ひろば見学	田代西部・東部
30	七滝見学	七滝

〈表 5〉。研修後の感想には、地域の方の学校への思いの強さと継承していくことの大切さが書かれていて、職員の地域理解を深めることにつながった。

(3) 【視点 3】学校と家庭・地域の双方向の関係の強化

① 双方向の活動内容の整理

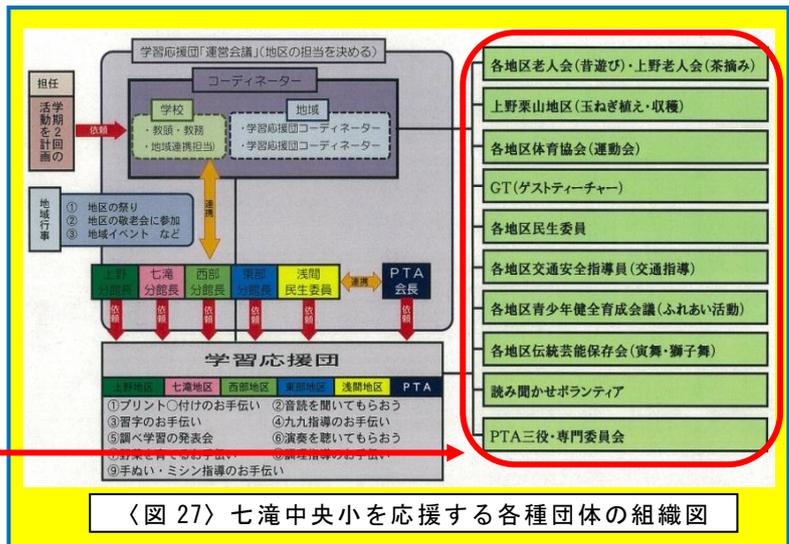
コミュニティ・スクールとして、地域と連携した活動を長期的・継続的に行うためには、地域に支援してもらえばかりではなく、児童や職員も積極的に地域へ出かけ、地域の活性化に貢献するような双方向の関係を強化していくことが大切であると考えます。双方向の活動内容を整理すると、「学校への支援活動」「五者による協働・共同」「お返し・貢献活動」の3つの活動がある〈図 26〉。



〈図 26〉双方向の活動内容

② 学校への支援活動

家庭・地域から学校への支援活動の充実にあたっては、学校だけではなく、家庭・地域の方々が活動への充実感を感じたり、児童とのつながりを深めたりすることが大切である。本校では、様々な団体と連携しながら、この活動の充実を図っている（図27）。



〈図27〉七滝中央小を応援する各種団体の組織図

③ 学習応援団との連携について

ここでは、特に学校への支援活動の中心として編成した学習応援団の事例をもとに本校の工夫点について説明していく。

ア 学習応援団の活動のシステム化

学習応援団の活動を2時間目に設定している（図28）。日課が固定化されているため、来校してくださる方や職員が学習時間を間違えることなく、計画が立てやすい。

また、学習応援団の活動が、どの学年も同じような流れで行われ、来校される地域の方や学校の職員が戸惑わないように、学習応援団の活動の前後の流れを統一している（表6）。

活動	時	刻
朝自習・集会	8:20~	8:30
朝の会（健康観察）	8:35~	8:45
1校時	8:45~	9:20
2校時	9:40~	10:25
3校時	10:30~	11:20
4校時	11:30~	12:15
給食	12:15~	12:55
昼休み	12:55~	13:40
歯みがき 掃除		
5校時		
6校時		
帰りの会		
アイ・タイム	15:55~	16:30
バス（月・木）	16:45	出発
（推進委員会）	16:30~	16:50
総合運動クラブ （火・金）	16:45~	17:45
バス（火・金）	17:45	出発

〈図28〉固定化された日課

〈表6〉学習応援団の活動の流れ

時間	学習応援団の方への対応	担当
学習前	会議室へ案内 ・名札作成・名簿記入	用務 管理職
	担任と打ち合わせ	担任
	児童の迎いで教室へ	児童
学習中	活動写真	養護・用務
学習後	会議室へ案内 ・口頭での感想の聞き取り ・写真撮影	担任 管理職

感想の聞き取りや集合写真を学習後の対応として位置付けたことで、その後の通信発行の作業がスピーディーに行われるようになった。この通信は、学習応援団の方へのお返しとなり、大変喜ばれている。



〈図29〉名札



〈図30〉名簿

二つとも、職員が聞き取って記入。名簿には、名前（漢字）・住所を書いている。学校だより、お礼の葉書を出すときに役に立つ。

イ 学習応援団の学習内容

学習応援団の学習として、各学年、1・2学期に2回3学期に1回、年間5回の学習を計画した。

計画された学習応援団の学習内容を見てみると、様々な教科での活用がなされていることが分かる〈表7〉。赤字で示した内容は、本年度、新たに増えた学習内容で、各担任が工夫しながら計画していることが分かる。

教科	内 容
算 数	計算丸付け、かけ算九九暗唱、そろばん
国 語	御船町紹介パンフレット発表、朗読劇発表、暑中見舞いを出そう、自動車図鑑発表、音読発表、学習後のクイズ発表、新聞作成のためのインタビュー、 習字、心に残った本の紹介、短歌・俳句作成
音 楽	おはやしのリズム作り、演奏会、リズム打ちに挑戦
社 会	戦争時の暮らし聞き取り、農家の仕事聞き取り、地図発表、見学旅行のまとめ発表
家庭科	エプロンのポケットつけ、小物作り、味噌汁作り、ポテトサラダ作り
道 徳	林田能寛さんについて、寅舞への思い
総 合	寅舞練習、 学習発表会リハーサル、収穫した米でおはぎ作り、太鼓発表
図 工	のこぎりや金槌を使った制作、 似顔絵を描こう、花紙で作品作り
生 活	夏の生き物探し
体 育	フォークダンス

【1年：くちばしクイズ（国語）】

学習した「くちばし」の音読を聞いていただき、感想をいただきました。子ども達自作の「くちばしクイズ」にも答えていただき、児童はとても意欲的に発表できた〈図31〉。



〈図31〉クイズ発表

【2年：似顔絵を描こう（図工）】

似顔絵のモデルになっていただいた〈図32〉。「美人に描いてね!」とおっしゃったので、子ども達の意欲もあがり、素敵な作品ができた。できた似顔絵は、お土産として持ち帰っていただいた。



〈図32〉似顔絵モデル

【3年：毛筆“日”（書写）】

“日”の学習をした。書く姿を見ながら、たくさん声かけをしていただいたことで意欲的に学習に取り組むことができた〈図33〉。子ども達自身も「前より上手に書けた!」と、上達を実感することができた。



〈図33〉習字練習

【4年：見学旅行の新聞発表（社会）】



〈図34〉新聞発表

子ども達が見学旅行で学習したことをまとめた新聞を発表した〈図34〉。学習応援団の方から感想だけでなく、通潤橋についての歴史なども話をしていた、学習が深まった。

【5年：フォークダンス（体育）】

オクラホマミキサーと御船音頭と一緒に踊っていただいた〈図35〉。順番に手を取りながら「リズムに合ってきたよ」「上手になった」と声をかけていただき、子ども達は上手に踊ることができて喜んでいました。



〈図35〉フォークダンス

【6年：心に残っている本の紹介（国語）】

「心に残っている本」という題名でそれぞれ書いた本の紹介文を聞いていただいた〈図36〉。感想や自分の読書経験を話していただき、子ども達は興味深く聞くことができた。



〈図36〉本の紹介

ウ 学習応援団の授業コンセプトの共通理解

学習応援団の活動を継続していく中で、学習内容によっては「教えることができるか不安」「人前で上手く話ができるかな」と、地域の方が躊躇されるものがあった。また、児童と地域の方との交流の場や地域の方の活躍の場が少ない学習であったため、学習応援団の方にとっては充実感があまり感じられない活動も見られた。

そこで、学習応援団の活動が学校・家庭・地域にとって充実した活動で長期的・継続的な活動となるよう授業コンセプトの練り直しを行い、全職員での共有を図った。

- ① 地域の方との交流を通して対話が生まれ、児童のコミュニケーション力の向上につながるもの。
- ② 地域の方との交流を通して児童の学習意欲向上につながるもの。
- ③ 学習応援団の学習の中で、地域の方が、「役に立ててよかった」「感謝してもらい嬉しかった」と感じられるもの。

校内研修で学習内容や学習形態、学習の流れについてグループで交流し、検討を行う時間を確保したことで、これらの授業コンセプトの共通理解を深め、学習内容の質を高めることにつながった〈図 37〉。



〈図 37〉 学習内容検討会の様子

エ 学習応援団の授業の様子

○学年の例（2年：生活「夏さがし」）

一単位時間を三つに分割して、いろいろな活動を組み合わせた。

学習過程	学習活動	学習の概要
出会い 10分	1 学習応援団の方を児童が案内して活動する教室へ行く。 2 最初に出会いの活動や自己紹介を行う。 名前を覚え、親しみをもって活動できるよう、自己紹介にも時間をかける。学習応援団の方には、名札を付けていただく。	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶を行い、地域の方に、家の近くの植物を児童に紹介していただいた。    <p>〈図 38〉 出会いの様子 〈図 39〉 地域の方のお話 〈図 40〉 自己紹介</p>
活動 25分	3 学習応援団の方と児童との対話ができるような活動にする。 4 できるだけ簡単な活動を選ぶように気を付けた。	<ul style="list-style-type: none"> グループで学習応援団の方に自己紹介をした。 班に分かれて学習応援団の方と運動場で生き物探しを行った。名前を教えていただいたり、図鑑で調べたりして活動した。   <p>〈図 41〉 草花調べ 〈図 42〉 生き物探しの様子</p> <p>活動では、交流による対話ができるような活動、地域の方にとって難しい内容ではなく簡単な活動、地域の方が「役に立ててよかった」と感じられるような活動を工夫する。</p>
お礼 10分	5 来校していただいた方へ感謝の気持ちを伝える。 6 感想やお礼、ふれあいの活動を入れる。	<ul style="list-style-type: none"> 最後に児童が育てた野菜で作った漬物を出して感謝の気持ちを伝えた。  <p>〈図 43〉 漬物でおもてなし</p> <p>学習計画の中にお礼の時間も入れておき、しっかりと感謝の気持ちを伝えられるようにする。肩もみ、手遊びなど、ふれあう活動を入れることで、「来てよかった」と思ってもらえるよう工夫する。</p>

地域の方々と児童との「交流」を大切にした学習を行ったことで、地域の方の笑顔も増え、「楽しかった、また来るね」と、児童から元気をもらい帰る姿があった。授業コンセプトを全職員で共有し実践したことで、児童と地域の方との絆をさらに強くしている。

④ お返し・貢献活動

ア 学校だよりによる情報発信

学習応援団等でお世話になった方へのお返しと学校教育活動の地域や保護者への情報発信のために学校だより（コミュニティ・スクール通信）を発行した（図 44）。作成は、地域連携担当の教務を中心に、教頭、各担任が行っている。

学校だより 紙面作成のコンセプト

- ①画像中心で読みやすいこと
- ②児童の反応やお礼の言葉等を掲載すること
- ③地域の方の画像や指導された内容やコメントを掲載すること
（児童の様子は、学級通信や PTA 新聞で掲載）



七滝中央小学校だより 第184号
令和元年6月24日(月)
大竹 紳一郎(校長)

この文だけで、活動が一目で分かる見出しを工夫。



増本さん 増永さん 釜川さん 藤本さん 土田さん 宮川さん

6月4日(火)に、上野地区の増本和男さん、増永信義さん、釜川長生さん、藤本繁美さん、土田康繁さん、宮川一幸さんにおいでいただきました。3年生が「学校のまわり探検」をして、まとめた地図と学んだことの発表を聞いていただき、今と昔の上野の様子の違いを教えてくださいました。

今とは違う地域の様子に子どもたちはびっくり!!



「え～！そんなところに!!」「お肉屋さん!?!」「もうひとつ病院!?!」今とは違う学校の周りの様子を聞くたびに子どもたちは目を丸くしていました！発表を聞いていただくだけでなく、昔の様子をお話ししていただくことで地域の変化も学ぶことができました。授業の最後には一緒に歌いながら手遊びをし、笑顔いっぱい時間となりました。おいでいただいた皆さん、たいへんありがとうございました。

地域の方が全員はっきり分かる写真とフルネームの掲載。学習応援団の方々の紹介。

児童と地域の方の交流の様子がよく分かる写真を選ぶ。

少ない文字数だからこそ、一言一句、しっかりと吟味する。教務、教頭、校長みんなでチェック。

〈図 44〉 学校だより



〈図 45〉 紙面検討の様子

見られた方の感想

- ・毎回見るのをとても楽しみにしています。
- ・久しく会っていない人が掲載されたのを見て嬉しかった。
- ・学校の取組がよく分かる。

学習応援団の方の感想

- ・いつも掲載されるのが楽しみです。



作成した学校だよりは、地域に150部(回覧用)、PTAに52部、教育委員会、町内の各学校、町議に配付している。学習応援団でお世話になった方へは、感謝とお礼の気持ちを込めてカラー版を送っている。

発送業務は、教務と用務が担当し、ホームページへのアップを情報教育担当が行っている。3年目を迎えた学校だよりは、2学期までで247号を発行することができた。学校の取組を発信することが、地域での話題となり、学校と家庭・地域のつながりを深めることにつながっている。



〈図 46〉玄関掲示の学校だより

学校の玄関や階段、職員室前には、A3に大きくした学校だよりを全て掲示〈図 46〉しており、来校された方が足を止め、写真を見ながら談笑する姿が見られた。



〈図 47〉学校だよりファイル

学校だよりは、1号からファイルに保管している〈図 47〉。活動内容の振り返りをするとき、地域の方の顔と名前を知りたいとき、支援者人数を調べたいときなどに記録や引き継ぎ資料として大変役に立っている。

イ お礼の会の充実

双方向の関係づくりの1つとして、お世話になった地域の方々を招待して感謝の気持ちを伝える「お礼の会」を行っている〈図 48〉。「お礼の会」として、自然体験活動の後には、お茶会、玉ねぎ給食会、芋パーティー、梅ジュースパーティー等が行われている。体験を通して学習した事をまとめた発表や収穫したものをを使った料理を考え、お世話になった方々に喜んでもらえるような活動になるようにしている。

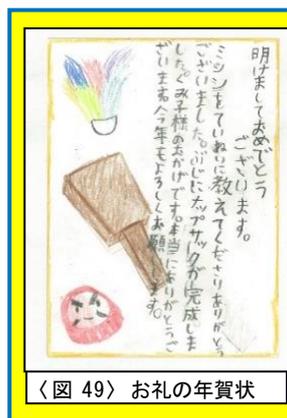


〈図 48〉お礼の会の様子

この「お礼の会」を通して、児童にとっては、招待した方への接し方などを学ぶ機会となっている。地域の方々との絆も深まり、「また来るね」「楽しかったよ」と言っただけ、児童もとても喜んでいた。

ウ 手紙・カレンダーでのお返し（お礼）

学習応援団や地域の自然体験活動等でお世話になった方々に暑中見舞いや年賀状を児童が送っている〈図 49〉。多くの方から返事をいただき、児童はとても喜んでいた〈図 50〉。



〈図 49〉お礼の年賀状



〈図 50〉地域からの返信

6年生児童への返信には、「みんなの頑張りが私にたくさんの感動と元気をもらっています。いつも元気な笑顔ありがとうございます。」と書かれていて、学習応援団への参加が、地域の方々に元気を与えていることがうかがえた。

また、毎年6年生の版画作品をカレンダーにして、お世話になった地域の方々へお礼として渡している。6年生と職員が担当し、感謝の気持ちを伝えながら配付している〈図 51〉。各家庭



〈図 51〉職員カレンダー配り

を訪問して配付することで地域を知ることができ、地域の方との絆も深まっている。

エ 地域行事参加による貢献活動

学校と地域・家庭が双方向に支援し合う関係を築くために積極的に地域行事に参加をしている〈図 52〉。地域の祭りや敬老会等では、児童が「太鼓」や「獅子舞」「童話発表」等の披露を行った〈図 53〉。児童が参加することで、保護者やその兄弟等も行事に参加し、地域行事を盛り上げることに繋がっている。

敬老会では、自己紹介で祖父母の名前も紹介するなど、発表内容の工夫や肩もみなどの触れ合える活動を行うことで、地域の方々が親近感をもってもらえるようにしている〈図 54〉。

また、地域行事への参加希望のプリントを該当地区だけでなく、全児童に配付することで、他地区からの参加が増え、地域行事の活性化につながっている。さらに、職員も地域行事へ積極的に参加し、児童を引率するだけでなく、地域の方と親しくなることで地域との絆を深めている。

今年度は県文化課からの依頼を受け、熊本県文化財保護大会で4年生が「寅舞」を披露した〈図 55〉。

「熊本県文化保護大会」の出演が決まってからは、寅舞保存会の方が何度も指導に来てくださり、当日は素晴らしい発表ができた。児童にとっては、練習や発表を通して寅舞について学習を深め、自分の地域に誇りをもつことにつながった。地域の方にとっては、地域の伝統芸能を広めることにつながると、地域を挙げて喜んでいただいた。

このように、児童と職員が様々な地域行事へ参加することで、学校と家庭・地域との双方向の関係の強化を進めることができた。

<令和元年度 地域行事参加>

- 5月 七滝滝祭り（6年太鼓）←本年度は中止
- 7月 宮部兄弟顕彰祭（6年太鼓）
- 8月 吉無田ふれあい夏祭り（5年太鼓）
- 9月 田代東部敬老会（低学年）
- 9月 上野敬老会 上野地区 上野地区児童
平蔵祭り（4年寅舞、5年太鼓、奉納相撲）
- 10月 七滝公民館祭り（5年太鼓）
北田代美緑のむら里祭り（3年獅子舞、6年太鼓）
- 11月 熊本県文化財保護大会（4年寅舞）

〈図 52〉 参加した地域行事



〈図 53〉 宮部兄弟顕彰会太鼓披露



〈図 54〉 敬老会での発表



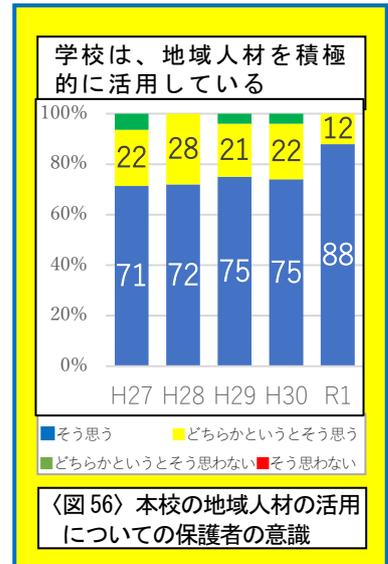
〈図 55〉 熊本県文化財保護大会の様子

8 研究の成果と課題

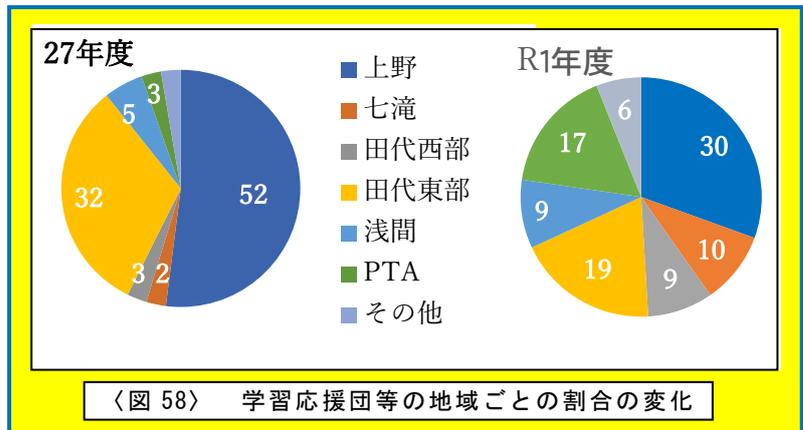
(1) 【仮説1】(視点1) 組織の編成・活用についての考察

① 本校の地域人材の活用についての保護者の意識は、年々向上してきており、高い値を維持している(図56)。継続して、学校が地域と十分に連携・協働できていると保護者から理解されていることが分かる。また、支援していただいた人数は、27年度に比べ約3倍に増えた(図57)。

地域ごとの割合では、偏りが少なくなり、統合した全ての校区から来校していただけるようになってきている(図58)。新規来校者も増加しており、本校の教育活動に関して、家庭・地域の理解は促進できていると考える。



② 「組織の編成・活用」により、人材の掘り起こしと全ての旧校区からの来校を計画的に設定することができており、編成した組織が、学校と家庭・地域との連携・協働を支える基盤としての役割を果たしていることが分かる。



(2) 【仮説2】(視点2) 活動内容の「見える化」についての考察

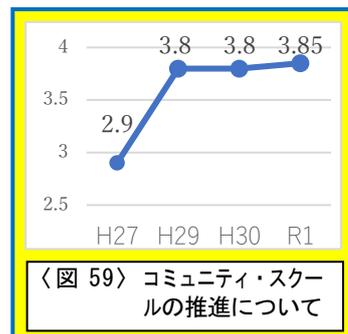
① CS年間計画、自然体験活動実施のフロー図、地域行事参加計画書等をまとめた「七中小CSハンドブック」の活用を通して、職員からは、次のような声が聞かれた。

- 七中小CSハンドブックの活用で、先の活動まで見通すことができ、早めに実施計画をたてることができた。
- 関わりがない学年についても活動の内容が共有できた。
- 活動計画の提示は活動の予定が分かりやすく、全職員での共通理解につながった。
- 七中小CSハンドブックを加筆修正したことで、より使いやすいものになった。
- 担任が交代しても活動の開始がスムーズにできた。

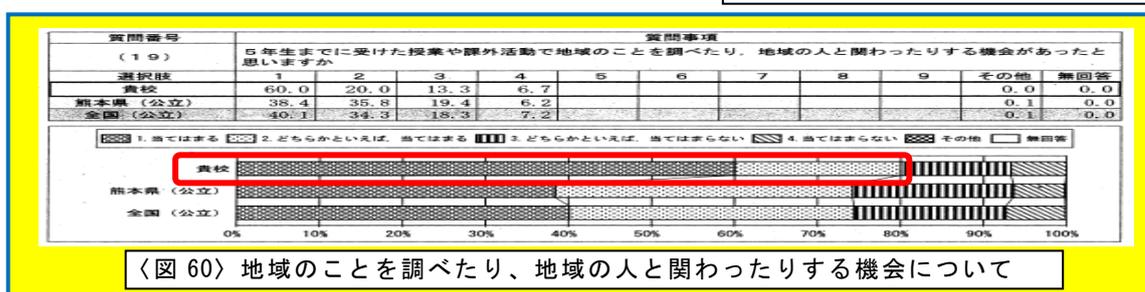
活動内容の「見える化」をしたことで、今まで分からなかった他学年の学習内容が分かり、職員室でも活動内容や支援していただいた方の話題が増え、学習内容の工夫が見

られるようになった。また、来年度の活動についての意見交換が積極的に行われ、地域の方との活動を通して新たな学習での活用も考えるなど、連携活動に広がりが見られた。

- ② 職員の教育評価において、「コミュニティ・スクールの推進」の項目のポイントが高くなっている〈図 59〉。令和元年度の全国学力学習状況調査（質問紙）において、「地域のことを調べたり、地域の人と関わったりする機会があった」と答えた児童が80%もいた〈図 60〉。職員のコミュニティ・スクールに対する関心と理解が高まり、学習の中で地域の教育力の活用がしっかりと行われていることが分かる。



*教育評価は「4：できた 3：どちらかというときできた 2：どちらかというときできなかった、1：できなかった」の4段階で評価し、その平均を出している。



〈図 60〉 地域のことを調べたり、地域の人と関わったりする機会について

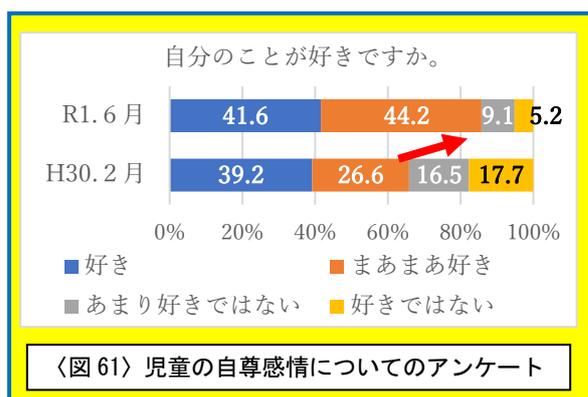
(3) 【仮説 3】（視点 3）学校と家庭・地域の双方向の関係の強化についての考察

- ① 家庭・地域から学校への支援活動として、学習応援団の学習を各学年、年間 5 回計画し、様々な教科での学習を実施することができた。児童からは、次のような感想があがっている。

- 地域の方とたくさん話ができたとし、たくさん褒めてもらってやる気が出た。
- 手を取りながら優しく教えてもらったので、よく分かった。
- 地域のことを教えてもらって嬉しかった。

児童の学習意欲の向上や学習内容の理解が高まったことが分かり、学習応援団の方との学習が充実した活動となっている。

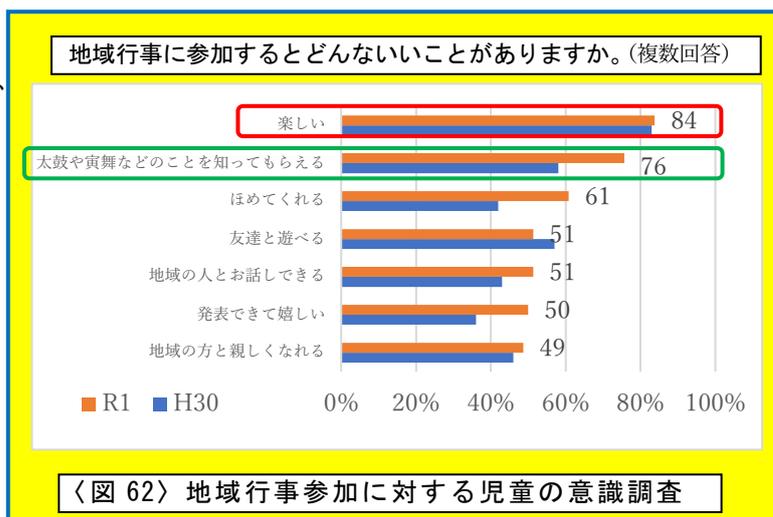
- ② 児童の「健康生活アンケート」において、自分のことが「好き、まあまあ好き」と答えた児童が増加している〈図 61〉。学校と家庭・地域が連携・協働した活動の中で、学習応援団や地域の方から褒められたり拍手をもらったりすることで児童の自信となり、自尊感情の高まりにつながっていると考えられる。



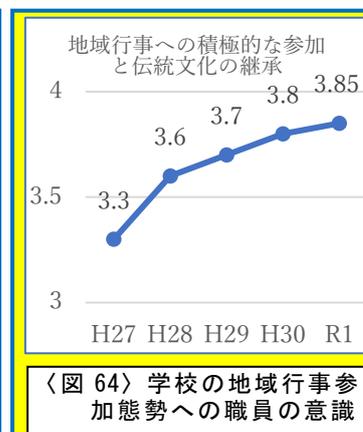
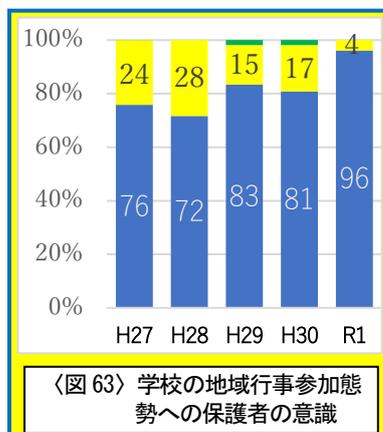
- ③ 休みの日の参加にも関わらず、地域行事への参加を楽しみにしている児童が多くなっており、意欲的に参加しているこ

とが分かる〈図 62〉。

- ④ 地域行事への参加を通して、自分たちが取り組んでいる伝統芸能のことを知ってほしいと感じている児童が、76%に増加していた。高学年ほど、その割合は増加し、地域の伝統芸能の継承に対する意識が高いことが分かる。



- ⑤ 保護者は、「学校は地域行事に積極的に参加している」で「そう思う、やや思う」と回答していた〈図 63〉。合わせて、学校評価で職員の意識を見ても、その割合は高くなっていった〈図 64〉。児童と職員が、地域行事へ積極的に参加し、地域との連携を深めていることが分かる。



- ⑥ 地域の方からは、次のような感想をいただいております。児童や職員が地域へ出かけていくことの意義を感じるとともに、それが学校と家庭・地域との絆を深めることにつながっていると感じる。

○子どもの元気な声を聞いて、私たちも元気になりました。
 ○太鼓は素晴らしかった。とても好評だったので、来年もまた来てください。
 ○敬老会で子どもたちが自己紹介をしたので嬉しかった。あの方のお孫さんだと思うと、肩もみの時の会話も弾みました。

(4) 今後の展望

- ① 「魅力ある学校づくり協議会」で地域の方と学校運営方針の共有やテーマを焦点化した意見交換ができています。今後は、さらに目標の達成や課題解決に向けて連携・協働できるような具体的取組の詳細について理解を深めていきたい。
- ② 作成したフロー図について、全職員で随時加筆修正しながら更新していくことで、職員間の共通理解をさらに図っていきたい。
- ③ 学習応援団活動については、来校していただく方々の新規開拓のための方策や活動内容について、さらに質を高めていきたい。

お わ り に

本校の教育活動の特色が、一目瞭然で分かる場所がある。これまで発行した「学校だより 学び合い」を掲示した玄関ホールである。「玄関は家の顔」と言われるが、まさに本校の玄関は、本校の特色である「地域とともにある学校」を強く表現している空間となっている。学校だよりは、3年前から通算で247号も発行することができた。

この学校だよりが実によくできている。何より「地域の方々（ご高齢の方も含めて）が読みやすい」様々な工夫がなされている。分かりやすくインパクトのあるタイトル文字、小さすぎない本文の文字フォント（13ポイントに統一）、文字量が少ないがゆえに大切にしている文言や表現。発行まで職員で何度も何度も吟味を繰り返し、1つの学校だよりが完成されている。さらに、地域の方のフルネーム入りの集合写真も掲載されているため、新しい職員も学校だよりをもとに、地域の方々とつながることができている。来校された方が足を止め、写真を見ながら談笑される姿がよく見られる。また、地域の皆さんから「毎回見るのをとても楽しみにしています。」「掲載されるのが楽しみです。」「久しく会っていない人が掲載されたのを見て嬉しかった。」「これからも続けて行ってほしい。」などの感想をいただいている。

この学校だよりは校区725件の全戸に回覧もしている。学校だよりを発行することで、地域での話題となり、学校と家庭・地域のつながりを深めることに大いにつながっている。

本校は、素晴らしい文化・歴史・伝統・人材に恵まれた校区である。子ども達には、校区のことをよく学び、文化や伝統を受け継ぐとともに、御船町、七滝校区の未来を切り拓いていくことが期待されている。そのためにも、本研究の取り組みを継続し、更に充実・発展させることが重要だと考える。

末尾ながら、本校の教育実践に対し、ご支援ご協力いただいた保護者、地域の皆様、また、指導・助言を頂いた諸先生方に感謝の意を表します。



玄関ホールの「学校だより」

【主な参考文献】

- 『コミュニティ・スクールって何?!』（2015年 文部科学省）
『コミュニティ・スクール』（2015年 文部科学省）
『平成27年度 地域とともにある学校づくり推進フォーラム（熊本会場）』（2015年 文部科学省・熊本県教育委員会）
『平成27年度 地域とともにある学校づくり推進フォーラム（山口会場）』（2015年 文部科学省・山口県教育委員会）

【研究同人】

大竹紳一郎	村田裕紀	坂本達男	高木裕彦	池上 幸	須藤 昂	古里ひかる
岩瀬知安季	馬場貴浩	塚本葉子	下田景子	石井美保	吉山典子	栗崎 薫
田中君子	吉田眞美	松尾梨香	島崎志穂乃			